

■東京ダービー（SI）アラカルト（過去全 65 回の分析）

- ※第 1 回（昭和 30 年）から第 9 回（昭和 38 年）までは「春の鞍」の名称で実施
- ※第 10 回（昭和 39 年）から第 11 回（昭和 40 年）までは「東京都ダービー」の名称で実施
- ※第 13 回（昭和 42 年）から第 44 回（平成 10 年）までは大井ダ 2,400m で実施
- ※記録は令和 2 年 5 月 20 日時点

■ 1 番人気馬と 2 番人気馬は 3 着内率が 6 割超

単勝 1 番人気馬は 24 勝、2 着 8 回、3 着 9 回で、3 着内率が 63.1%、単勝 2 番人気馬は 10 勝、2 着 16 回、3 着 14 回で、3 着内率が 61.5%、単勝 3 番人気馬は 12 勝、2 着 12 回、3 着 6 回で、3 着内率が 46.2%となっている。上位人気馬、特に単勝 2 番人気以内の馬はそれなりに堅実と言って良いだろう。

■ 人気馬が上位を占めた年も珍しくない

過去 65 回のうち 46 回は、単勝 3 番人気以内の馬が勝利を取めている。また、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツーフイニッシュ決着は 27 回、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツースリーフィニッシュ決着は 11 回ある。

■ 羽田盃との“二冠”を達成した馬は 25 頭

羽田盃と東京ダービーの両方で優勝を果たした馬は過去に 25 頭いる。なお、残る“一冠”とされていたレースも制して南関東 3 歳クラシックの“三冠馬”となったのは、第 13 回（昭和 42 年）のヒカルタカイ、第 21 回（昭和 50 年）のゴールデンリボー、第 24 回（昭和 53 年）のハツシバオー、第 29 回（昭和 58 年）のサンオーイ、第 32 回（昭和 61 年）のハナキオー、第 35 回（平成元年）のロジータ、第 47 回（平成 13 年）のトーシンブリザードと、これまでのところ 7 頭いる。

■ “無敗”のダービー馬は 2 頭だけ

2 着以下に敗れた経験がないまま東京ダービーを制したのは、第 47 回（平成 13 年）のトーシンブリザード（東京ダービー優勝時点で 7 戦 7 勝）、第 50 回（平成 16 年）のアジュディミツオー（同 4 戦 4 勝）の 2 頭だけである。

■外国産馬は2勝、牝馬は5勝

外国産馬の優勝例は、第1回（昭和30年）のローヤルレザー、第51回（平成17年）のシーチャリオットと、これまでに2例ある。また、牝馬からは第1回（昭和30年）のローヤルレザー、第11回（昭和40年）のヒガシユリ、第35回（平成元年）のロジータ、第37回（平成3年）のアポロピンク、第57回（平成23年）のクラーベセクレタと、5頭の優勝馬が出ている。

■騎手別の歴代最多勝記録は「6」

騎手別の勝利数を見ると、赤間清松騎手の6勝がトップ。石崎隆之騎手、高橋三郎騎手、戸崎圭太騎手が4勝で続いている。なお、出走回数が37回に達している的場文男騎手は、これまでに2着が10回、3着が5回あるものの、未だに優勝経験がない。

■調教師別の歴代最多勝記録は「5」

調教師別の勝利数を見ると、川島正行調教師、出川己代造調教師が5勝でトップタイ。竹内美喜男調教師が4勝で単独3位、佐藤賢二調教師、武森辰己調教師が3勝で4位タイとなっている。

■優勝例がない馬番は16番のみ

枠番別勝利数を見ると、6枠（12勝）が単独トップ。7枠（11勝）が単独2位、5枠（10勝）が単独3位となっている。また、馬番別勝利数を見ると、13番（7勝）が単独トップ。5番、9番（各6勝）が2位タイ、6番、10番、11番、12番（各5勝）が4位タイである。なお、未勝利の馬番は16番だけだ。